

お札と切手の 博物館 ニュース

Banknote and Postage Stamp
Museum News

Contents

展覧会報告 特別展「紙幣寮の銅版画師—明治時代を^{きざ}鑄んだ職人の技—」より 紙幣寮の草創期を支えた4人の銅版画師とその活動の記録

シリーズ 松田緑山の門人たち —その2 松田龍山—

新収蔵資料紹介 大正から昭和初期の印刷局写真

2026/7/1 Vol. 58



「紙幣寮の銅版画師—明治時代を^{きざ}鑄んだ職人の技—」より

紙幣寮の草創期を支えた 4人の銅版画師とその活動の記録

令和8年1月14日(水) から3月8日(日) まで、第2回特別展「紙幣寮の銅版画師—明治時代を^{きざ}鑄んだ職人の技—」を開催しました【図1】。

当館では、日本をはじめ世界各国の紙幣や切手等をさまざまな角度からアプローチした展覧会を主に開催してきましたが、今回の特別展では初の試みとして、紙幣寮の御用銅版画師に注目した内容としました。

独立行政法人国立印刷局の前身である紙幣寮では、創立後間もない明治初期の頃、印刷をするための設備が十分に整っていなかったため、原版製作と印刷を民間の銅版画師に委ねていました。本展では、このような紙幣寮の製品製造を支えた御用銅版画師で^{まつだろくざん}松田緑山、^{うめむらすいざん}梅村翠山、^{やなぎだりゅうせつ}柳田龍雪、^{なかむらげつれい}中村月嶺を取り上げ、その活動や作品を通して、卓越した職人の技をご紹介します。



【図1】 展示会場

はじめに、これら4人の銅版画師のプロフィールを概観しましょう。

■御用銅版画師たちのプロフィール■

京都の銅版画舗「玄々堂」を営む^{やすおき}松田保居の長男として誕生した松田緑山(1837～1903)は、江戸時代に流通していた藩札の製造に携わっていました。この経験と、^{びじんどうばん}微塵銅版と呼ばれる極細彫りの技術が認められて政府の招聘に応じ上京、日本初の全国共通紙幣である「太政官札」【図2】や、我国で初めて発行された「龍文切手」の原版製作という大役を担いました。

梅村翠山(1839～1906)は、松田緑山と比肩する実力の持ち主です。明治6年より紙幣寮に出仕しましたが、在任期間は短く、わずか1年ほどでお役御免を言い渡されて紙幣寮を去ることになります。しかしその後は、営んでいた印刷会社「^{けいがんどう}慶岸堂」を拠点



【図2】
太政官札 金10兩
慶応4 (1868) 年

に活躍の場を広げました。ベストセラーとなった諷刺雑誌「まるまるちんぶん團團珍聞」(明治10年創刊)【図3】の表紙を手掛けたことは特筆すべき功績で、明治時代の出版文化にその名前を刻むことになりました。

柳田龍雪(1833~1882)と中村月嶺(1846~1922)は師弟関係にあり、明治8年に発行された国際郵便切手「鳥切手」の原版製作者として、切手収集家の間では広く知られた存在です。

本展では、このような紙幣寮の銅版画師の実像をより具体的にご理解いただくため、中村月嶺が記した「紙幣寮 おんしたえじょうのおほえごようひかえ御下絵上納覚御用控」(以下、「御用控」)【図4】を翻刻パネルと共に展示しました。

「御用控」は、中村月嶺が紙幣寮から受注した下絵の注文の内容を記録した帳面で、注文の詳細のほか、俸給や出勤に関する記録も見られます。単なる業務記録にとどまらず、明治期の職人の勤務実態の全容が明かされた実録と捉えることができるでしょう。

「御用控」の表紙には、「七年十一月ヨリ明治十一年十二月迄」と書かれています。月嶺は、明治7年から9年まで紙幣寮に奉職していることを考えますと、仕事を開始して直ぐに、この控帳を書き始めたことが分かります。明治9年以降の記録は、紙幣寮を辞した後、自らが営んだ印刷会社「せいうんかく晴雲閣」が、同寮より請け負った仕事へと移行していると考えられ、月嶺の職業的な歩みを連続的にたどることができます。

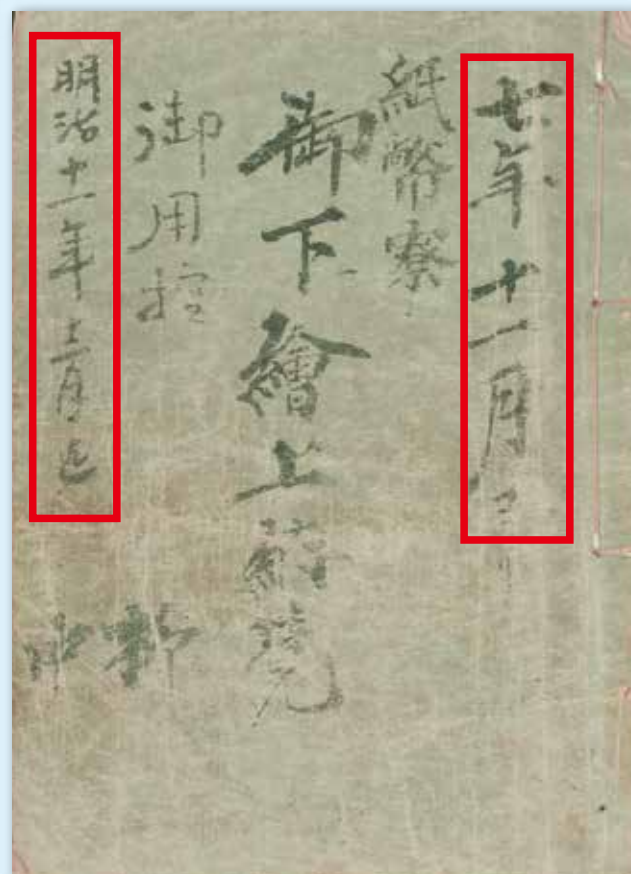
展示会場では、「御用控」に書かれた鳥切手の下図や丹羽純一郎訳『英国 ろんどんしんはんじょうき龍動新繁昌記』の挿絵に関する記述のページと関連資料等を展示しました。ほかにも、「御用控」には興味深い記述が多数見られます。そのいくつかをご紹介します。

【図5】は、年不詳ですが、ある年1月の柳田龍雪の勤務表です。新年は11日から勤務を開始し、27日と28日以外は休みなしで出勤していることが分かり、ハードな仕事の実態が理解できます。

【図6】は、明治10年の記述です。月嶺は、この年には既に印刷会社「晴雲閣」の経営を開始しているため、自社が紙幣寮より受注した仕事の内容になります。紙幣寮に在職中の記述とその後の記録を比較し大きく異なる点は、在職時にはなかった料金の記載です。紙幣寮お抱えの一人の職人が、経営者へと転身した人生の変化を、雄弁に物語る記録と言えるでしょう。



【図3】「團團珍聞」第1号
明治10(1877)年創刊



【図4】「紙幣寮 御下絵上納覚御用控」表紙
明治7(1874)年 中村月嶺記

松田緑山らによる手彫りの原版を用いた製品は、品質の均一化が難しく、また江戸時代からの手法とほぼ同じであったことから偽造品が横行し、大きな課題となっていました。

第3代紙幣頭に就任した得能良介(1825～1883)はこの問題を重視し、課題解決のためにエドアルド・キヨッソーネ(1833～1898)を日本に招きました。キヨッソーネが日本にもたらした西洋の先進的な印刷技術は偽造防止に大きく貢献し、次第に紙幣寮の製品製造の主流となっていました。このような経緯により、松田緑山をはじめとする御用銅版画師たちは、その役目を終えることになりました。

彼らが紙幣寮に在職した期間は長くはありませんでしたが、その短い期間の中で、草創期の紙幣寮における製品製造を支えた重要な技術者であった事実を看過することはできません。

近代日本の紙幣、切手など、公共性の高い製品製造の基盤を築いた彼らの仕事と足跡をたどり、改めて彼らが遂行した職務について、その歴史的意義を考える必要があると言えるでしょう。

(学芸員 林 直子)

【図5】「紙幣寮 御下絵上納覚御用控」第5丁
柳田龍雪の勤務表

【図6】「紙幣寮 御下絵上納覚御用控」第15丁と16丁 金額表示がある。

松田緑山の門人たち

前号よりスタートした同シリーズ第2弾は、松田緑山の実弟にあたる松田龍山をご紹介します。

松田龍山(嘉永6〈1853〉年月日不詳～明治40〈1907〉年1月25日)は、京都の銅版画舗・初代「玄々堂」松本保居^{やすおき}の末子として誕生しました。当館が所蔵する龍山の銅版画作品「三條大橋御高札場より洛東遠望之図」【図1】の下辺刊記【図2】には、「皇國中與(ママ)開基洋法銅鑄師末男松田龍山以鉄筆刻之」とあり、初代玄々堂の末子であることを明確にしています。本名は民次郎、龍山は号で、ほかに保信、儀平などがあります。

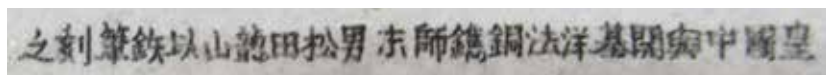
兄の緑山が、新政府により上京を命じられた明治2年頃、兄と共に京都から東京へ移住し、紙幣寮に奉職しました。紙幣寮で携わった製品の詳細は不明ですが、後に兵部省海軍部水路局に移り、明治5年から15年まで海図の製作にあたりました。

上京前の龍山は、玄々堂が得意とした「微塵銅版^{びじんどうばん}」と呼ばれる、精密幽微な極細の刻線をもって多数の名所絵を彫刻し、その腕を磨いていました。たとえば、当館所蔵の「洛西梅之宮」【図3】は、特に龍山の名品のひとつとして今に伝わります。

龍山は、兄の緑山と異なり、遺された記録が多くはありません。しかし、京都の名所^{きどころ}を鏤んだ作品からは、玄々堂の流れをくむ確かな技術を認めることができ、明治時代に活躍した優れた銅版画家の一人として、今後、活動の解明が期待されています。(学芸員 林 直子)



【図1】松田龍山鏤「三條大橋御高札場より洛東遠望之図」
製作年不詳



【図2】
【図1】の下辺刊記



【図3】
松田龍山鏤「洛西梅之宮」
製作年不詳

新収蔵資料紹介

大正から昭和初期の印刷局写真

お札と切手の博物館では、明治草創期から昭和期までの印刷局事業にまつわる写真資料を収蔵しています。これらは、155年の歴史の中で、印刷局が携わってきた事業や製品、当時の作業風景などを克明に記録し、その実態を今に伝える重要な資料として、本博物館ニュースの記事をはじめ、特別展等を企画するうえでも欠かせない存在となっています。

今回は、新たに収蔵する機会を得た写真資料について、ご紹介します。

活版課職員・久須美市太郎氏と大礼

明治25(1892)年から昭和11(1936)年まで、印刷局の活版印刷部門(活版課)に従事した久須美市太郎氏(図1)。活版課の中でも、製本や官報の発送に関する作業を担った第四室の長を務めた人物です。今回、久須美氏のご遺族から、当館が未収蔵の写真資料をご寄贈いただくことができました。

印刷局の活版印刷事業は、明治8年に始まりました。政府の印刷機関として明治5年に設立された太政官正院印書局を併合し、その事業を引き継いだものです。作業内容は、活字の鑄造から組版(植字)、校正、印刷、製本まで一貫したもので、明治16年に創刊した官報のほか、国の出版物の印刷を行っていました(図2)。

久須美氏が在籍していた昭和初期には、活版部門の一大事業につながる国家行事、昭和天皇の即位の礼(大礼)が執り行われました。そして、大礼に伴う官報号外の発行と、式典の全容を記録した『昭和大礼記録』の製作を活版部門が担うこととなったのです。久須美氏は両者に携わった人物でした。

印刷局では、官報の速報について、式典の当地で記事を作成、印刷し、現地で発行するために、京都に臨時出張所を設けました。記事の編集、印刷、発売事務に当たる職員20名が派遣されましたが、そのうちの1人が久須美氏で、印刷後、発売するまでの「仕上」を担当しました。

この官報号外には、特に記事が多数盛り込まれたこと、内容が極秘扱いであったことから、関係者は前夜から徹夜で作業に当たり、当日の17時になって無事発行することができたといえます(図3)。当館ではこの時の記念写真を収蔵していますが(図4)、前列の幹部以外は人物の特定ができておらず、今回のご寄贈により、初めて久須美氏を特定することができました。



【図1】久須美市太郎氏
(昭和6年撮影、新収蔵品)



【図2】大正10(1921)年ごろの活版印刷室



【図3】大礼当日に発行された官報号外



【図4】京都臨時出張前での記念撮影(後列中央付近に久須美氏)

一方、大礼の翌年には、大礼に関する詳細な記録(『昭和大礼記録』)を永久保存することが閣議決定されました。その印刷、製本にあたっては、印刷局の技術力を結集し、当時1万年はもつとされた用紙やインキ、のりなどを用いたほか、布装丁や小口すべてに金箔の装飾を施すなど、仕上げにも力を入れました。昭和6年に完成したA4判全25巻の豪華本『昭和大礼記録』は、内閣に5部、宮内省に5部納められ、そのうちの1部は、国立公文書館に保管されています(図5)。

そして、この『昭和大礼記録』の完成直後に撮影したとみられるのが、今回ご寄贈いただいた写真です(図6)。台紙には「昭和大礼記録記念」「昭和6年6月28日納本」と記され、左端に積載された本の背表紙を拡大すると、特徴的な菊の御紋が見えるので間違いないでしょう。昭和大礼記録については、当館にはほとんど資料がないため、当時の作業風景を知る貴重な1枚です。また、写真と併せて、久須美氏が残した覚書も複数点寄贈されており、その中には、豪華本発行後に普及版として編纂、発売された『昭和大礼要録』についての一連の記録も見ることができます。

大正から昭和期の印刷局行事写真

こうした大礼にまつわる写真のほか、久須美氏が在籍した活版課の職員たちと撮影した写真等とともに、印刷局が催した各種の行事の際に撮影された大人数の集合写真もご寄贈いただきました。

その中には、本博物館ニュース54号でも取り上げた慰安旅行や、昭和初期に実施された郊外での活動にまつわるもの等があり、これまでは分からなかった実態を鮮明に捉えた資料として、記録文書を補完する役割を果たしてくれます(図7、8)。



【図8】
昭和初期に郊外で開催された
芋掘りと思われる写真

また、元々収蔵していた慰安旅行の写真にも、久須美氏と思われる人物を発見しました(図9)。

このように、新たな資料と出会うと、元々収蔵している資料についても新たな知見や価値を見出すことができます場合があります。今回ご寄贈いただいた覚書等と併せて、今後も調査を続けていきたいと思います。

(学芸員 土井 侑理子)



【図5】『昭和大礼記録』
昭和6(1931)年
国立公文書館所蔵



【図6】『昭和大礼記録』の完成記念に撮影された写真(矢印が久須美氏)



【図7】200余名の職員が参加した第2回伊勢参宮
団集合写真 大正11(1922)年
(前列右寄りに久須美氏)



【図9】第11回慰安会(熱海)の幹部写真
大正15(1926)年(前列左端が久須美氏とみられる)

令和8年度
企画展

お札の豆図鑑

COMING SOON
展覧会予告

—「文字」「かたち」「色」—

昔のお札と現在のお札を比べると、いろいろな違いが分かります。文字は難しい漢数字からアラビア数字へ、すかしはシンプルな模様からより緻密で複雑なデザインに進化し、最近では、色によってお札の種類を見分けることができるようになりました。

このように、お札には身近でありながら見過ごされがちな、小さくも意外な発見がたくさんあります。この企画展では、そのようなお札の発見を、「文字」「かたち」「色」の3つのポイントからじっくりと見ていきます。図鑑をめくるように、お札のトリビアを楽しもう！



画像1



画像2

【画像1】
日本銀行券B100円（表面）板垣退助

【画像2】
日本銀行券B100円（裏面）国会議事堂
昭和28（1953）年

100あるいは百という文字が、合計で
115個印刷されているお札。

イベント 手すき体験

「すきげた」という道具を使って、紙の原料をすくってみよう！
紙はどのように作るのか、「すかし」はどんな仕組みなのか、
実際に作って確かめてみましょう。
夏休みの自由研究にもご活用ください。

開催日時 7月24日（金）～8月30日（日）

※詳細はホームページでご確認下さい。



ご利用案内

入館
無料

開館時間：9:30-17:00
休館日：月曜日（祝日の場合は翌平日）
年末年始、臨時休館日

交通

JR京浜東北線「王子駅」（中央口）下車 徒歩3分
東京メトロ南北線「王子駅」（1番出口）下車 徒歩3分
都電荒川線（東京さくらトラム）「王子駅前」下車 徒歩3分
＊駐車場はありません。

常設展

新日本銀行券の紹介
偽造防止技術の歴史—印刷・製紙技術
重要文化財 スタンホープ印刷機
お札の移り変わり/世界のお札
切手の移り変わり/世界の切手
＊特別展開催時は一部展示の変更があります。

独立行政法人 国立印刷局
お札と切手の博物館

〒114-0002 東京都北区王子1-6-1

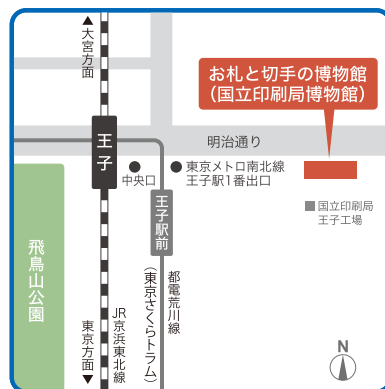
TEL.03-5390-5194

<https://www.npb.go.jp/museum>



お札と切手の博物館

検索



発行：お札と切手の博物館（国立印刷局博物館）

発行日：令和8年7月1日 ©2026

本書掲載の内容を許可なく複写、複製、転載することを禁じます。

※この冊子は再生紙を使用しています。